

第三部 言葉の時間形態～想起・約束・現在～

A. 想起としての説教

B. 約束としての説教

C. 現臨者の説教

第17章 現臨の多様性

【主題】

想起せられた方（A）、そして約束されておられる方（B）は、さまざまな仕方で現臨される。いずれの仕方での現臨も彼の現臨にほかならず、彼の現臨として語らねばならない。だが、いずれも多くのものの中のひとつの現臨の姿でしかない。

第I節 前提・霊の現臨（要約）

現臨を語る必要性と困難

我々が想起（過去）と約束（将来）を通して語っている方は、どこにおられるのか（現在）、我々は、具体的に場所をあげ、どのように現臨されるかを語らねばならない。が、この方の現臨は極めて複合的、多様な仕方で現れる。

現臨の多様性に於ける統一

だが、それでは、様々に異なる別々のキリストが宣べ伝えられてしまう。現臨の多様性における統一を問い考える必要がある。

- 霊の現臨とは、あの名の瞬間。“あの名の瞬間”において、「御名を呼ぶこと」と、「呼ばれる方」との間の“差異”が廃棄される。
“この瞬間”は出来事として起こる。

- 現臨する方を説教する

霊の現臨の中で、信仰は「見ることを学ぶ」（第27章Ⅱ節¹）

「見る」ということの中で、キリストによって引き起こされる一種の神律的相互作用が起こる。つまり、ご自身について語られること（説

¹ 第27章「聴衆への道」第Ⅱ節「見るということ」

教)によって現臨し、御自身が語られる。説教のサクラメンタルな性格 (By 禰津牧師) 。

説教によって御自分が現在のものとされることで、御自身が臨在される。これこそ、我々が霊の現臨と呼ぶ、「時の頂点」。想起と約束が切り結ぶところ。

現臨する方について我々が語ることは「断片的性格」を持たざるを得ない。それゆえに、特別な仕方（弁証法的に語ること）で補完される必要がある。

- (1) 王座にまで挙げられた方、昇天について語る (Ⅱ節)
- (2) 低くされた方、貧しき方について語る (Ⅲ節)
- (3) 教会として現実に存在される方について語る (Ⅳ節)
- (4) 世界の創造者として現実に存在される方について語る (Ⅴ節)

第Ⅱ節 王座にまで挙げられた方の説教と昇天についての説教

第Ⅲ節 貧しき者におけるキリストの現臨についての説教

第Ⅳ節 教会として現実に存在するキリストについての説教と聖霊降臨についての説教

ボンヘッファーのテーゼ

「キリストが神の現臨であられるのと同じように、教会はキリストの現臨そのものである。

新約聖書は、『**教会として現実に存在するキリスト**』

と我々に啓示する」

逆転できない

× ~~「キリストとして現実に存在する教会」~~

教会として現臨される方の説教

- (1) 教会としてのキリストの現実存在は、隠されており、聖霊による解釈を通じてのみ認識可能。
- (2) この解釈は、「手ごたえのある」もの。

→

我々は、見えないものから見えるものへという過程の途上で、この現臨するキリストを説教する。

「我々がキリストについて聞き、今信じ、望んでいること」と、「信仰においてキリストについて見ていること」との間に緊張関係があるところでのみ、我々は現臨する方を説くことができる。この緊張関係は、「御言葉」と「しるし」の間の緊張関係。

教会として現実に存在する方の説教の手本は、聖霊降臨の説教

ヨハネ福音書 14：23-31²のボンヘッファーの説教分析

「イエスが肉において来られたということは、この世に向けられたこと。その霊における来臨は、イエスを愛する者に起こる。」

「キリスト御自身が我々の内に今、生き、そして支配してくださるのであり、今からのちは、我々の生活は、我々のうちにおけるキリストの生活なのである。＜キリストを愛する者における内住の確言＞。しかし、そうなれば、我々が主キリストを愛し、その言葉を保持する時にのみ、これらすべてが真実となり、我々はそれを証言することができる。＜教義学的発言ではなく約束＞

² ヨハネ福音書 14：23-31”イエスは答えて言われた。「私を愛する人は、私の言葉を守る。私の父はその人を愛され、父と私とはその人のところに行き、一緒に住む。私を愛さない者は、私の言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉は私のものではなく、私をお遣わしになった父のものである。私は、あなたがたのもとにいる間、これらのことを話した。しかし、弁護士、すなわち、父が私の名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、私が話したことをことごとく思い起こさせてくださる。私は、平和をあなたがたに残し、私の平和を与える。私はこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな。『私は去っていくが、また、あなたがたのところに戻って来る』と言ったのを、あなたがたは聞いた。私を愛しているなら、私が父のもとに行くのを喜んでくれるはずだ。父は私よりも偉大な方だからである。事が起こったときに、あなたがたが信じるようにと、今、そのことの起こる前に話しておく。もはや、あなたがたと多くを語るまい。世の支配者が来るからである。だが、彼は私をどうすることもできない。私は、父がお命じになったとおりに行く。私が父を愛していることを世が知るためである。立て。さあ、ここから出かけよう。」”

。我々の生活がキリストに向かってさしのべられていけばいく
ほど、キリストは益々われわれの中に入ってこられるのである。
＜教義学的発言ではなく約束＞。我々が自分の中にではなく、キリス
トのところにのみ自分の全き救いを求め、キリストを自分たち
の主とすればするほど、キリストはより完全に我々のうちにい
まし、我々を確かに所有されるのである。」

「教会として現実に存在されるキリスト」を説教しようとする者は、
見る事ができない方を、新たに認識し見る一つまり「発見」せねばな
らない。現臨される方の説教は、「現臨される方が発見される」こと
を前提とする。

→現臨される方を「発見」することについて語る説教。

そこには現臨される方の自己証明が必要、つまり、啓示が必要。

⇒教会として現臨されるキリストを語る説教の言語形態がある。

- (1) 物語
- (2) 信仰告白
- (3) 教会の教え（教理）

第V節 世界の創造者の現臨についての説教

(第IV節の主題)

「御自身の創造における創造者の現臨」は、天にまで高められた方の高挙における現臨（Ⅱ節）とも、貧しき者・悲惨な者との同一化による現臨（Ⅲ節）とも、教会としての現実存在（Ⅳ節）とも、分離できない。復活の認識を通してのみ、世界の創造者と、その現臨を認識することができる。新しい創造としての教会こそが、古い創造をも理解し得る。

① ルターの認識

「アダムの墮落以降、創造者に対してだけでなく、その創造に対しても盲目となってしまった」とルターは印象深く強調。「神を（正しく）認識する者は、被造物を認識し、理解し、愛する。何故ならば、被造物の中に神の神たることの足跡が残っているから」「キリストが初めて我々を、創造者の認識へと引き戻してくださる。この認識のゆえにこそ天使は幸せなのだ」

キリストの認識は、新しい世界への展望を開く。キリスト認識を通しての自然認識は根本的に「終末論的行為」。だから、ルターは、「教皇やエラスムス³のような人には、正しい世界の見方は不可能だ」と言い切り、「宗教改革的認識と被造物の新しい認識との間には関連がある」と確言している。「我々は、今や来るべき生命のさしそめる暁の光の中にいる。何故ならば、アダムの墮罪によって失った被造物の認識を、もう一度獲得するに至ったから。」—キリストの創造における仲保者としての役割について、新約聖書（コリントⅠ 8:6, コロサイ 1:15 その他⁴）が語っていることを考えれば明かなこと。これらの

³ エラスムス デジデリウス・エラスムス (Desiderius Erasmus Roterodamus, 1469年(1466年?) 10月27日 - 1536年7月12日^[1]) は、ネーデルラント出身の人文主義者、カトリック司祭、神学者、哲学者。ギリシャ語新約聖書「公認本文」の著者。

人文主義者（じんぶんしゅぎしゃ、英: Renaissance humanists、中: 文藝復興人文主義者）とは、ギリシア・ローマの古典文芸や聖書原典の研究を元に、神や人間の本质を考察した、ルネサンス期（14世紀 - 16世紀）の知識人のこと。

⁴ コリントⅠ 8:6「私たちに、唯一の父なる神がおられ／万物はこの神から出／私たちもこの神へと向かっています。／また、唯一の主、イエス・キリストがおられ／万物はこの主によって存在し／私たちもこの主によって存在しています。」コロサイ 1:15「御子は、見えない神のかたちであり／すべてのものが造られる前に／最初に生まれた方です。」

発言が持つ適切さが、今日、改めて考えぬかれねばならない。

② だが、現代の説教は…

神のよき創造について語られることは殆どない。自然神学に陥るまい、とするあまりに、多くの説教者は自然を忘れてしまっている。

カール・バルトが、「教会教義学 創造論 I/2 p455」で引用している、バルトールト・ヒンリヒ・ブロッケスの嘆き“造り主のみわざについて ほんの僅かな努力でさえも/はらおうとせぬくせがついている どうして神の御氣に召すことがあろう/神に仕える者たちが、神の奇跡について語ろうともしないことを。”

説教の中で自然を語ることを断念しているのは、どれほど高価なものを失っているか、私達自身が知らねばならない。

イスラエルは、⁵**自然宗教とは対立して、この世界を、神の自己表現として理解せず、自然そのものを崇拝することはない。**にも拘わらず、全く囚われない自由な心で、「**被造世界は創造者を証するもの**」と見做し、自然を通じて神を賛美する（詩編第19篇）。トーラー（律法、聖書）を賛美しつつ、同じように創造を賛美する。天と地とは、神の啓示そのものではないが、明らかに神を証ししている。

また、イスラエルの賛美は、創造の世界の賛美に声を合わせて歌われる。「主よ、あなたのすべての御業は、あなたに感謝し、あなたの聖徒はあなたをほめまつるでしょう」（詩編145：10）。

現代で一般的な説教が抽象的なのは、創造者と救済者が分離されてしまい、この両者が一つであること、従って、救済は創造と無関係には宣べ伝えられないことが忘れられてしまっている事と関係がある。「造られたもの」を「造られた方」から認識するとき、自然は比喩的な性格を持つ。天と地の中に現存しておられる方から認識するなら、天と地はその方について語り始める。

かくして、この世界は、聖書の言葉で満ち、神の絵本となり、前創

じゅぶつ

⁵ 自然宗教 1 自然発生的に展開した宗教。アニミズム・呪物崇拝・自然崇拝などで、未開宗教・原始宗教といわれるもの。2 神の恩恵に基づく啓示宗教に対して、人間の本性である理性に基づく宗教。理神論などの類。

造の世界が説教の助け手以上のもの、特別な説教者そのものとなる。そうすれば、我々は、例えば小さい花や小鳥が、その「首」に福音をつけているのに気付く（おそらくルターの説教の中の言葉の引用であろう）。

だが、今日では、神を賛美する場合、創造から孤立したままで、全ての被造物と平行することなく、賛美している。この孤立が我々を賛美することに疲れさせているのだ。抽象的説教も沈黙する賛美の声も、キリストの先在を敢えて語ろうともせず、創造におけるキリストの仲介の働きも無視している、現在の宣教の欠陥の故である。

創造者についての説教、創造を論じる説教において、お手本となるものはあるのか。

お手本候補（1）啓蒙主義神学の説教について

啓蒙主義神学の説教ほどに、創造者への賛美を歌った時代は他にはない。創造者なる神は愛。だが、キリスト教会の救いの使信や教えは非常に疑わしいものとなる。啓蒙主義神学において、自然の諸法則は、神の存在を示す、目に見える証明。自然は、神の現実存在の、最も強力な論拠。そこでは、信仰は聞く事より、寧ろ見ることから来る。自然から始めて創造について説教するようになる。

⇒だから、とてもお手本にはなり得ない。

啓蒙主義神学の楽観的な自然礼賛による神理解についての反証

① ベルトールト・ブレヒト⁶の詩

② アルノー・シュミット⁷ 「悪しき創造者」

“本当にこの世界はましなところの少しもないところ。

そうでないというものは、嘘をついている。”

③ ペーター・リュームコルフ⁸

⁶ オイゲン・ベルトルト・フリードリヒ・ブレヒト（独: Eugen Berthold Friedrich Brecht、1898年2月10日 - 1956年8月14日）は、ドイツの劇作家、詩人、演出家。

⁷ アルノー・シュミット（1914年1月18日 - 1979年6月3日）は、20世紀ドイツの作家、翻訳者。極めて前衛的な作風で知られ、古今東西のテキストからの引用、ドゥーデンの規定する正書法の放棄、方言や俗語、独自の句読法の多用がその特徴である。自律的な文学言語を確立を目指し、言語表現の可能性を拡張した。

⁸ ペーター・リュームコルフ ペーター・リュームコルフ（1929年10月25日 - 2008年6月8日）は、

ブロッケスの「神のうちに見出す地上的満足」のパロディ、「gのうちに見いだす地上的満足」g=重力係数。

(結論)

我々は、啓蒙主義者と同じように、創造者と創造とを弁証論的に説教することはできない。敢えてするなら、「精神的なお喋りもの」の古臭さを証明することになる。①「樹木についての対話が殆んど犯罪」であるような世界②「自然神学よりも、自然悪魔論のほうが納得しやすい」時代③神に代わって重力が設定されるような時代にとって、創造者についての説教が、十字架についての説教と同じほどに躓きであることがありうる。これらの詩人たちの引用が明かにするのは、創造者とそのみわざについての説教が、18世紀の敬虔な啓蒙主義者の自然理解に逆らう仕方によってのみ、自然について適切に語れるようになる、ということだ。

創造それ自身は、よき神の御業として納得しうるようなものではなく、愛そのものであられる神のよき御業としての創造を認識するためには、説教を必要とする。

「創造は、和解以外のなにものでもなく、永遠の愛のみわざである。しかしまた、和解と同じように、創造それ自身も隠されている」
(ミスコッテ⁹ 『神々が沈黙する時』より)

啓蒙主義神学に基づき、創世記がナチスのアーリア主義の根拠とされた事に対する深い省察があるのではないか？

お手本候補(2) 自然主義神学について

自然主義神学は、自然に対する要求が大きすぎるが、自然について神学を為すことは、自然についてもう一度神学的に驚嘆することへの導きとなる。

戦後のドイツ文学に大きな影響を与えたドイツの作家である。

⁹ コルネリス・ハイコ・ミスコッテ (Kornelis Heiko Miskotte, 1894年9月23日 [ユトレヒト](#) - 1976年8月31日 [フォールスト](#)) はオランダの [プロテスタント](#) 神学者で [弁証法神学](#) の代表者。反ナチの神学者の一人。戦後、ライデン大学の神学部教授として、正統派の時代からカール・バルトまでの改革派神学の歴史を教えた。

二つの説教の発言を対比。

① ヨハン・フリードリヒ・バルト¹⁰

「わたしはこの両眼をもって、神が全くの愛であられるのを見るのです。すべてのものが…わたしに喜びをもたらすために存在しているのです」

② ヴィルヘルム・フィッシャー¹¹

自然な改めでもう一度、我々に身を向けておられる神による、よき創造のわざとして認識されなければならない。だが、それは自然なことではない。だから、祈りがある。

「私どものまわりにあるすべてのものをよく見つめ、あなたが父であることを知りうるように、私どもを教え導いてください！…（花や鳥のように）私どもまた神の子として、あなたの憐れみに信頼して生きうるのであり、集めることも、思い煩う必要もないことを、あなたの開かれた手から日ごと受け取れることを許されるもののことを、お互いに伝えあうことのゆるされていることを教えてください」

「神学的な自然の認識」とは、「自然を、十字架と復活とから見るようになる」こと。**自然の中における神の現臨があるとすると、それは甦って、天にまで挙げられた方の現臨なのだから。**そうでないなら、創造物や救済者から自然は分離させられてしまう。創造者と救済者はひとつであられる。故に、自然は、復活と昇天と堅く結びつき、孤立させられることはあり得ない。復活や昇天もまた自然から切り離されてはならない。「もし主が甦らなかったら、この世は滅んでいただろう」

創造と救済が不可分離⇒旧約も新約も分離できない。「キリストの

¹⁰ ヨハン・フリードリヒ・バルト（1713年6月11日 リュッベン生まれ、1775年11月6日ライプツィヒ没）は、ドイツのルター派神学者であった。ライプツィヒで教授および監督を務めた。

¹¹ ヴィルヘルム・フィッシャー（1886年4月19日 - 1962年2月26日）はオーストリアの音楽学者。ユダヤ人であったフィッシャーは、戦争中、教授として務めていたインスブルック大学を退職させられ、強制労働に徴用されました。他の家族はホロコーストで殺害される中、フィッシャーは生き延び、戦後、ウィーン市立音楽大学の学長に任命され、退職後はインスブルック大学の教授に復帰し教鞭をとりました。

甦りの中に、…ヤーウエの神の決定的な救済行為の隠された栄光を見ることになる」「…その時、説教も教育も創造を語りうる場所を獲得する。光を喜び、収穫を喜び、丘や畑の歌を歌う場所である。…その時、すべてはよいのだという宣教の言葉、この始めは終わりの始めであるが、また本当の始まりの始めでもあって、メシアの時の前触れ、永遠の規定を受けている一切のものが顕現する前触れであることを語る宣教の言葉が一響き渡る大声にしる、ささやき声にしる、語り継がれていく—そのための余地が、説教と教育の中に生じる。」

「**私どもの主が創造者であられ、過去においてもそうであられると**
いうことのゆえに、すでに『単に存在しているということ』そのもの
の中に含まれている救いについて説教が証しすることは、疫病のご
とく憂鬱の心が広がるこの時代においてこそ大切なのである。」

P531 後ろから3行目

しかし、どのようにそれを説教すればいいのか？

ヒント) 旧約聖書の中で創造物語と並んで、詩編が創造を賛美している。神に造られたものである自然は、賛美と歌の対象となる。詩篇や賛美歌が適切な発言形態となる。「知恵を尽くして、詩とさんびと霊の歌によって互いに教え訓戒せよ」¹² (コロサイ3：16)

例) エルネスト・カルデナールの詩 p532-p533

キリストの名はないが、これらの詩は、復活節から見てこそ初めて神学的に理解可能である。カルデナールが謳うのは、復活節的な地上の賛美。

分子生物学と宇宙科学と聖書の言葉が結びついて一つの発言となる、説教者は自由に創造のしるしを発見するが、それによって創造を損なうことはない。(例、「原子力をまとして」おられる⇒原子力は神の力を示すしるしとなる)。**ただ単に、存在そのものの中にある救い**

¹² コロサイ3：16 “キリストの言葉が、あなたがたの内に豊かに宿るようにしなさい。知恵を尽くして教え合い、諭し合い、詩と賛歌と霊の歌により、感謝して神に向かって心から歌いなさい。” (聖書協会共同訳)

を讃えるのみならず、よき創造を語ることで、創造者を賛美するのだ。そこで明かになるのは、我々は説教者として、この創造の主人公ではなく、寧ろ、苦悩と賛美において、この創造に参加する者である、ということ。

なぜなら、創造は、我々が自由に意のままに用いることのできるしるしではない。この「創造のしるし」が認識できるようになるのは、神を認識することによる。神認識によって、自然は、神の創造の「しるし」として自己をあらわし、説教の助けとなる。

だが、世界の創造者を現臨する方として説教しようとする者は、すべての悩みある被造物と共に救いを求めて（体の贖われることを求めて）、叫び声を挙げる。その時、心奪われる想いが近づき、我々は歌をうたわずにはおれなくなる。